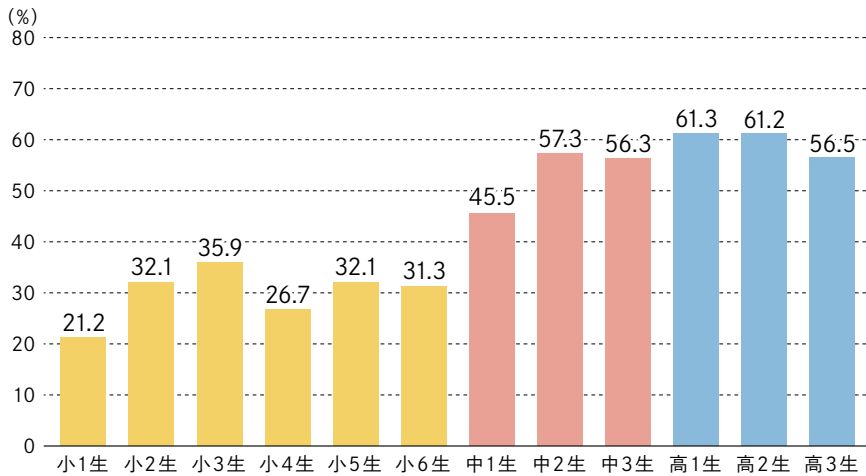


子どもたちを「勉強好き」にするには

今回取り上げるのは、子どもたちの学習意欲（勉強の好き嫌い）に関するデータです。同一親子の1年間の追跡調査から明らかになった、「嫌い」だった勉強が「好き」になった子どもの特徴をご紹介します。

1 学年が上がると増える勉強「嫌い」、中学2年生で半数超

図1 勉強が「嫌い」の比率（学年別、2016年7月）



注1) 「あまり好きではない」+「まったく好きではない」の合計。

注2) 小1～3生は保護者の回答。「お子様は『勉強』がどれくらい好きですか」と尋ねている。

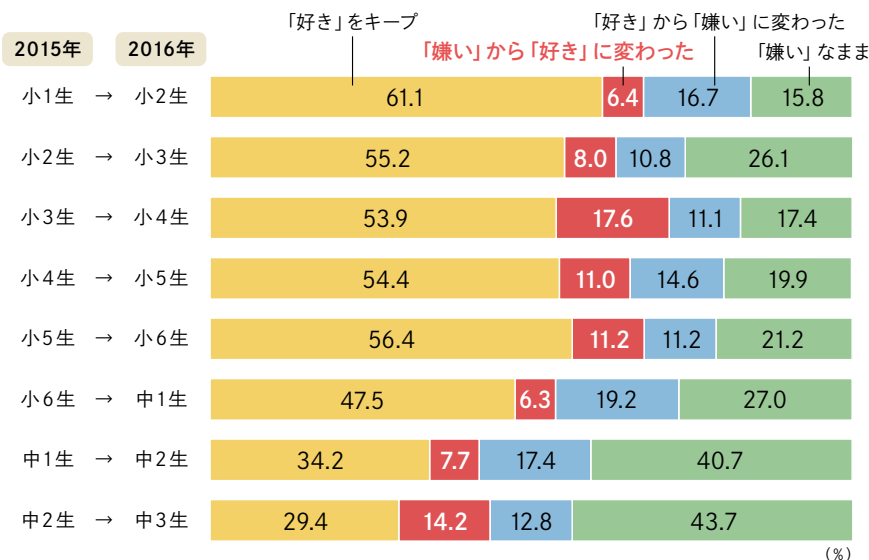
注3) 小4生～高3生は子どもの回答。「あなたは『勉強』がどれくらい好きですか」と尋ねている。

勉強が「好き」であることは、子どもたちが中学校や高校を卒業した後も、自ら学び続ける上で重要な要素である。しかし、小・中・高と学校段階が上がるにつれて、徐々に勉強「嫌い」が増えていく（図1）。

学年別に詳細を見ると、小学1年生から6年生までは、勉強が「嫌い」（好きではない）の比率は2～3割台にとどまっているが、小学6年生から中学2年生にかけて26ポイント増加し、中学2年生以降は「嫌い」が5～6割台と過半数を占める。つまり、勉強が「嫌い」なまま中学校や高校を卒業する子どもたちが多くいることが分かる。この「嫌い」の増加を食い止め、勉強「好き」な子どもを増やす鍵はどこにあるのだろうか。

2 1年の間に「嫌い」だった勉強が「好き」になる子どもが約1割

図2 勉強の好き嫌いの1年間の変化（学年別、2015年7月→2016年7月の1年間）



注1) 「とても好き」「まあ好き」を「好き」、「あまり好きではない」「まったく好きではない」を「嫌い」として、2015年7月と2016年7月の変化を示している。無回答・不明の人は除いている。

注2) 小1～3生は保護者の回答。小3生→小4生の変化は、保護者の回答と子どもの回答を用いている。

そのヒントになるのは「嫌い」だった勉強が「好き」になった子どもたちの存在だ。この調査では、同じ子どもを追跡し、勉強の「好き」「嫌い」が1年間でどう変化したかを見た（図2）。

すると、小学生だけでなく、勉強嫌いが半数を超える中学2年生以降にも、勉強が「嫌い」から「好き」に変わった子どもが、各学年おおむね1割前後いることが分かる。子どもたちは勉強が「嫌い」になるばかりでなく、何かのきっかけで「好き」になることもあるのだ。

また、データは提示していないが、この子どもたちは、勉強が「好き」になっただけでなく、ほかの子どもたちに比べて、前年よりも学習時間を増やしており、成績も上昇していた。そうしたきっかけづくりをどのように支援するかが大切だ。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2016」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの第1回調査（2015年実施）と第2回調査（2016年実施）。毎年、小学1年生から高校3年生の親子約2万1000組に調査し、同一の親子の成長のプロセスや成長に必要な環境・働きかけを明らかにする。今年7月に第3回調査を行う予定。

◎詳細は下記ウェブサイト（プロジェクトの進行状況）をご覧ください。
<http://berd.benesse.jp/special/childedu/>

データ解説

ベネッセ教育総合研究所
 研究員

橋本尚美

はしもと・なおみ



初等中等教育領域の子ども、保護者、教員を対象にした意識や実態の調査研究を担当。子どもの文化世界や学びの実態、子どもの成長環境としての社会・学校などに関心を持っている。

3 子どもたちを勉強「好き」にする多様な経験のサポートを

図3 勉強する理由（学習動機づけ）（中学生）

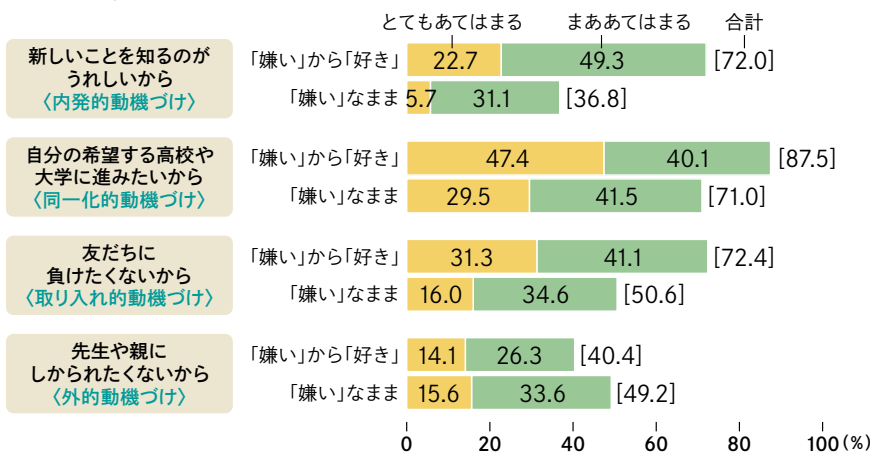


図4 勉強方法（学習方略）（中学生）

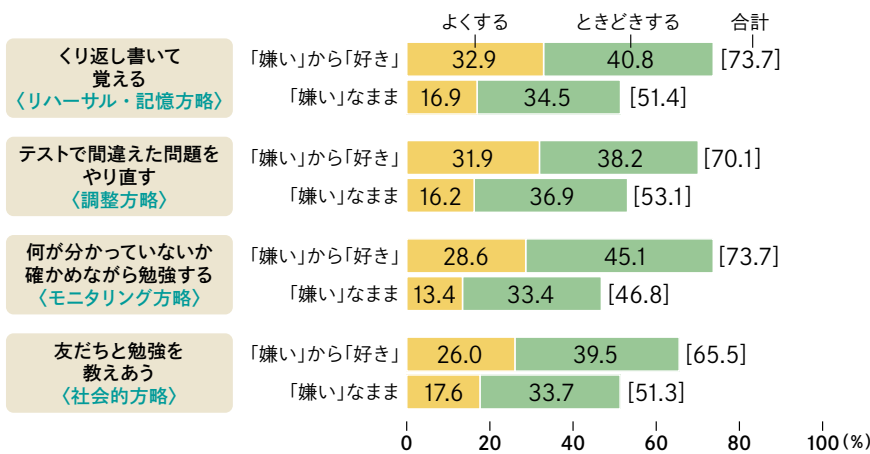
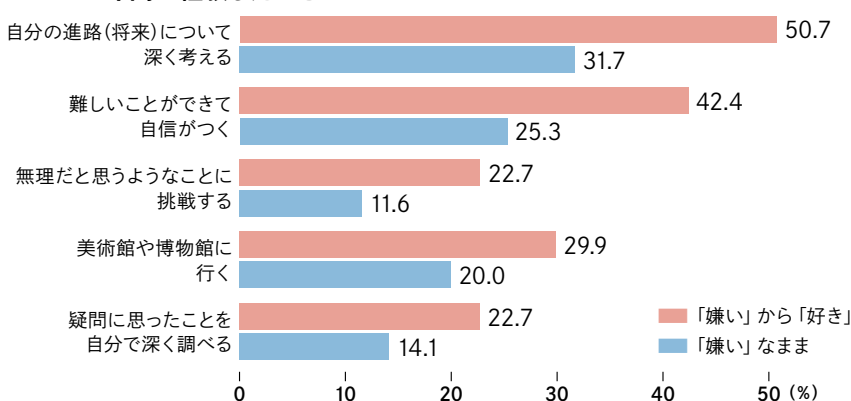


図5 この1年間に経験したこと（中学生）



好きになった子には多様な学習動機

以下では、小・中学生がほぼ同じ傾向のため、中学生のデータを基に解説する。

図3を見ると、勉強が「嫌い」から「好き」になった子どもは、「新しいことを知るのうれしい」（内発的動機づけ）、「自分の希望する高校や大学に進みたい」（同一化的動機づけ）など様々な学習動機を強く持っている。それに対して、「嫌い」なままの子どもは「知られたくない」（外的動機づけ）を理由にする比率が高い。

効果的な勉強方法の工夫も鍵

また、図4を見ると、勉強が「好き」になった子どもは、「何が分からないか確かめながら勉強する」（モニタリング方略）などの様々な勉強方法を活用している。効果的な勉強方法を身につけることが、学習の理解度を高め、子どもの勉強好きを促進すると思われる。

さらに、図5では、勉強が「好き」になった子どもは、「進路（将来）について深く考える」「無理だと思うようなことに挑戦する」などの割合が、「嫌い」なままの子どもよりも高いのが特徴である。

子どもたちがいつまでも勉強好きでいられるように、学校や保護者、そして周囲の大人には、学ぶうれしさを感じる機会を多く与えたり、効果的な学習方法をアドバイスしたりなど、多様な経験をサポートし、将来にわたって学び続ける姿勢を育ててほしい。

注1) 図3の「学習動機づけ」は学習意欲を高めて行動に向かわせること、図4の「学習方略」は学習効果高めるために意識的に用いる勉強方法のこと。

注2) 図3～5は、勉強が1年間で『嫌い』から『好き』になった子どもと『嫌い』なままの子どもの2016年7月の数値。[]内は合計。

注3) 図5は複数回答。23項目のうち差の大きい5項目を示した。